

## 巻 頭 言

学習院大学計算機センター所長 杉 田 善 弘

学習院大学に計算機センターが開設されたのは、1974年であり来年でちょうど30周年になる。この30年間、計算機センターの業務の規模は拡大の一途をたどった。計算機センターの業務は、各種情報処理を実施するための計算機システムの設計と管理、各種情報処理のための教育、そして各種情報処理の研究の三つである。計算機システムの設計と管理については、2003年4月にシステムの入替えを行い、大学計算機センターは、大学のみならず、学習院の幼稚園、初等科、男女中・高等科、女子大学の学生用、教員用合わせて1900台以上をひとつのシステムの下に統合し、管理している。教育に関しては、2003年度現在で、計算機センターの利用を登録している授業が318科目あり、2003年度入学学生の96%がセンターを利用している。研究については、毎年計算機センターの専任所員ばかりでなく、広く学内各学部・教育研究センターから集まっていた先生方に、それぞれの分野での教育・研究にコンピュータを利用することに関する最先端の研究をいただいている。そして、その成果をまとめたのが毎年発行しているこの年報である。

計算機センターの業務規模の拡大は、この30年間のコンピュータの発展を反映したものである。30年前には、コンピュータが果たす機能を的確に言い表していた計算機という言葉自体が、今ではコンピュータが行う機能のほんの一部しか表さなくなり、的確というには程遠い状態になってしまった。私自身のことを考えても、コンピュータをよく利用するようになったのは、アメリカに留学していた1970年代の終わりからで、その頃はカードリーダーにパンチで穴を開けたカードをとおしてプログラムを読ませなければならなかった。コンピュータを利用するのは、多くの場合がデータの統計解析を行うためだったのだが、データも含めて何百枚ものカードをカードリーダーがちゃんと読んでくれるか、冷汗のものであった。Fatalとかterminatedとかエラーに関するコンピュータ英語の意味を、身を持って味あわされたのもこの頃である。今では、パソコンで使うことが当たり前すぎて気にもしなくなってしまったワープロも、1980年代初頭に始めて売り出された時はワープロ専用機で価格は600万円以上というから、まさに隔世の感がある。

現在のコンピュータは価格も比べようもないほど安くなり、またユーザーのミスを補ってくれるほどユーザー・フレンドリーになった。用途も単なる計算やワープロからメールやインターネットを利用した買い物まで、どんどんと広がり、コンピュータの助けなしでの生活が難しいほどである。逆に言えば、このような急な発展についていくのが難しいと感じるユーザーも多いのではないだろうか。また、将来どのような用途が開発されていくかも関心事であろう。この年報に収録された最新の研究成果は、コンピュータの発展に合わせてユーザーを教育し、新しい発展領域を見定めるのに大いに役立つはずである。